慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中國科學院文學研究所民間文學組主編, 李星華記録整理, 『白族民間故事傳説集』
Sub Title	
Author	伊藤, 清司(Ito, Seiji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1961
Jtitle	史学 Vol.33, No.2 (1961. 2) ,p.130(252)- 133(255)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19610200-0130

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

を最初に明確に識別してキリスト教的ヨーロッパを世界の中心の座から追放し、歴史敍述にコペルニクス的革命をもたらしたこと、第二に歴史敍述において社會的經濟的文化的發展に他の如何なる先行者よりも重要な位置をあたえ、第三に歴史的懷疑主義の傳統をうけついで、自然科學の原理を歴史に適用したとの三つの點を著者はあげている。

勿論以上の三點について彼の限界も指摘されている。第一の點では、新しい普遍史の輪廓に盛るべき内容は不十分であり、成功しているとは言えない。第二では社會の歴史に作用する法則、メカニズムを發見しようとの思想的深さ、强靱さがない。第三の點では、人間の心理の深さを看取する洞察力の缺除から、彼は歴史的懷疑主義の深みに入り込みすぎ、それが史料批判の技術的能力の不十分さと相俟つて、しばしば人間の心の本性とは矛盾しないような事象をも起り得ないものとし否定することとなつた。

何れにせよ近代歴史學に對するヴォルテールの貢献は大きい。本書の著者は近代歴史敍述におけるヴォルテールの位置をボスエとテーヌ、ミシュレーとの間に置くことによつて歴史家ヴォルテールの研究を閉じている。

最後に若干の私見を挿むなら、ヴォルテールの先行者及び同時代人についての著者の該博な知識、又ヴォルテールの著作、その小論文、パンフレット類に到るまでの著者の刻明な探求がヴォルテールとその先行者との關係についての著者の見解を說得的なものにした反面、ヴォルテールの歴史敍述の積極的な要素が後世十九世紀の歴史家にどのように繼承されて行つたかについての兩者の關係を明らかにしようとする著者の意圖は成功していると言い難い。それ故、歴史家ヴォルテールの近代歴史學への貢献を著者は說くが、更に多くの論證を要求されるのではなからうか。又近代歴史學へのヴォルテールの貢献を言うなら、マイネッケが「歴史主義の成立」において强調した十八世紀前期ロマン主義とヴォルテールとの關係も言及されるべきではなかつたらうか。

しかし、本書のヴォルテール研究において有する意義の大なることは今更言うまでもない。

卷末に添えられた第一次史料、第二次史料のビブリオグラフィは極めて有益である。

（米田　治）

中國科學院文學研究所民間文學組主編
李星華記錄整理

『白族民間故事傳說集』

人民文學出版社
一九五九年九月刊

最近の中國における傳說・說話の類の研究および關係出版物の概況については、近く別に一文を編む予定であり、こゝでは重複の煩雜は避けるが、おそらく二・三百に達するこの種刊行物がこゝ數年の間に出版されたものと推定される。然もこうした傳說・說話集の取材する地域は黑龍江から海南島に及ぶ中國全土にわたり、その對象とされた民族も、いわゆる少數民族の殆んどすべて

を網羅しつゝあつて、この方面の研究に關心をもつ者にとつてはこの景況は甚だ注視を惹くものがある。本書はそれら群書の一つであるが、資料の不足をかこつ西南中國の傳說類を收錄した出版物の一つであると同時に、比較的よくまとめられた資料的價値に富む書であるという點から、とりわけ紹介の價値あるものと考えられる。

本書『白族民間故事傳說集』は、一九五八年秋、中國科學院文學研究所の派遣する雲南民間文學調査組が雲南西北の白族自治州を探訪し、白族の間に傳承される傳說・說話を蒐集整理し、翌五九年九月、北京において上梓したもので、これに採り上げられた作品數はすべて二七篇。

そも〳〵白族、卽ち民家族は大理・鄧川・洱源・劍川を中心に、今日約六十萬の人口を算えるといわれる少數民族であるが、早くから中國史書にも現われ、漢民族との接觸もすくなくないが、その民族的出自・系譜に關しては先刻來、論爭の對象になつていることは周知の通りである。本書は先づ冒頭に「關于白族的幾點情況」と題する毛星氏の小論をのせ、白族住地の自然環境と彼らの經濟生活及び風俗慣習・宗教信仰・更に中國文獻にみえる白族關係史料並びに漢民族との諸關係を概說し、彼らの傳說・說話の理解に便たらしめている。この前文はもとより概說以上のものではなく、然も、些か學問的でない、意圖的な言辭も弄されてはいるが、數ある中國出版の少數民族民間故事集の中で、二五頁もの紙面を費して當該民族の紹介をしているのは、本書のもつとも出色とするところであり、稗益するところ少くない。

さて、二七篇の傳說・說話中、先づ中國の古傳說との關係に注目されるものが少くない。卽ち洱源採錄の「開天辟地」の篇は文字通り天地創始・人類發生の神話であるが、いわゆる磐古傳說・洪水傳說の類型に屬するものである。また、「浪穹龍王的傳說」の篇の一つ「龍王原是个殺蟒英雄」は同じく洱源地區の傳承であるが、その後半は晉の張華の『博物志』中の「昇仙谷」と殆んど一致するなど、白族の傳承の古さを示唆するものがあるが、然し、本書には輯錄されてはいないが、別に彼らには漢族間に膾炙する「梁山伯和祝英臺的故事」など、（相當の改變はあるが）廣く流傳している模樣であり、また各種傳說・說話中には佛教思想と並び儒教的色彩も認められるのであつて、漢・白兩族間に共通する說話類の問題は緻密にして愼重な究明が欲せられ所以である。つぎに、世界的に著名な赤頭巾の物語は中國では「狼外婆」・「熊外婆」等々の名で廣く分布し、西南中國の諸族の間にも散見するが、洱源・鄧川地區に傳えられる「蕁麻與艾蒿」は蕁麻（いらくさ）と艾蒿（よもぎ）が往々にして所を同じくして生育する由來を語つた植物說話であるが、その大半はこの赤頭巾型で構成されている。

雲南滇西の山間で、今日なお燒畑耕作を營むものの多い彼ら白族の間に傳えられる口承中で、特にわれ〳〵の興味をよぶのは我が國の「繪姿女房譚」や「三人兄弟型譚」と同型の說話のみら

れる點である。例えば本書の「巧女」篇（洱源）は前者の型の說話であるが、この種說話は內容から推しても、それ程古い發生の說話とは考えられぬ。これが土地を異にして傳承されながら話の內容に殆んど變化のみられないのは、ストーリーの面白さ、奇拔さが作用しているのであろうか。洱源の一老婆の語る「轆角庄」の傳說もまた日本の炭燒小五郎譚の白族版であつて、これは別に「三姐妹」の名で同地方で流布しているようである。

勿論、本書には「望夫雲」（一）（二）（共に大理）や「白蟒園營」（劍川）「浪穹龍王的傳說」の一つ「龍王現原形」（洱源）のように白族住地の地形や彼らの歷史・社會生活に結びついた口傳も含まれている。またこの地方に傳えられる火把節の由來譚である「火把節」の傳說のように、彼らの年中行事の一端を察知することの出來る篇も一、二に止まらない。（尙、白族の北に接して住む納西族にも「火把節的由來」の傳說がある。但し、內容は白族のものと全く異なる）しかし、二七篇を通覽して特に强く感じるのは、龍蛇に關する傳承の極めて顯著な點であろう。「アンドロメダ型」說話である「蝴蝶泉」（大理周城）及び、この類型に屬する「小黃龍」（大理）・「蛇骨塔」（大理）・「龍王原是个殺蟒英雄」（洱源）は申すまでもなく、「茈碧湖的傳說」（洱源）・「白蟒園營」・「白王打天下」（大理・洱源）・「羅刹」（大理）・「開天辟地」・「長生得寶」（鄧川）・「金龍報仇」（大理喜州）・「龍女三小妹」（洱源）・「珠虛壺」（劍川）はすべて龍蛇の登場する傳說・說話でその數は本書の半ばに達する。

白族の滇西地區には洱海・茈碧湖・劍湖等の彼らが「海子」とよぶ大湖をはじめ、大小の湖沼が點在し、河川がこれらを貫いて流れているが、この地方は極めて魚族にめぐまれ、その漁獲物の一部は、遠くビルマやインド、あるいはヴェトナムの地に輸出されているといわれるが、これら湖沼・河水に依存する生活とその氾濫の恐怖、そして一方では素朴な農耕生活等は、おのずから彼らの信仰を水→龍蛇に結びつけているのであろうか。それにしても彼らの傳說の類には海洋性に富むものが目立つのであつて、文化交流の觀點からの配慮もまた必要なのかもしれない。鄭紹埜氏は先般、白族に顯著なこの龍蛇信仰を問題とされたが、確かにこの究明は白族傳說・說話の位置づけに或る種の示唆を與える相異ない。しかし、隣接諸族にもこの傾向はあるのであつて、これには同時により廣範圍な比較研究がなされなければならないであろう。

本書には上述の通り毛星氏の白族の紹介を載せる外に、この書の記錄整理の責任者である李星華氏の「關于白族的民間故事傳說」という二一頁の解說が跋文として付記されており、毛氏の前文と相俟つて本書の充實をはかつている。この點も裏表紙に申譯け程度の簡單な解說を付するに過ぎない他の類書に比して、本書の特色とするところある。たゞその解說は量的に卓越してはいるが、他書同樣、類型的であり、採集者の立場が余りに前面に出すぎて

いるのは殘念である。卽ち一例をもつて示すならば、白娃公主が父王の反對を押して一炭燒の妻となる云々の「轆角庄」の口承を「柏節夫人」や「望夫雲」と共に「舊時代不合理的婚姻制度」に反抗する點を喧傳强調して「堅貞不屈人的傳說」の一類とするが如きがそれであるが、然し、この事はそも〳〵現代中國における少數民族民間文學の研究の目的に立入る根本問題であつて、こゝに本書のみをとり上げて云々するのはもとより當を得ないことというべきであろう。とまれそうした分類法に對する不滿は不滿としても、本書の解說は我々にとつて資料的價値が少くない。尙、この解說によれば、河源地方に「鳥弔山」と呼ぶ傳承があつて、これは昔一對の鳳凰が羅坪山よりこの山頂に飛來して一片の羽毛を脫落して以來、每歲舊曆九・十月の頃、西方より群鳥翔來して、その羽根を搜したずねる云々という傳說で、李氏も言及している通り、彼らの生活が野鳥の狩獵に深く結合している點を示唆するものがある。私が去る第十五回日本人類學會・日本民族學協會連合大會（於熊本）で言及した通り、西南中國の繪姿女房譚が我が國のそれと著しい類同を示しながら、只一點不思議な程に共通して示す差異があり、それは王宮に移つた妻君に遇いにゆく時の夫の姿が、中國の場合、鳥の羽根でつくつた衣であるという點なのである。これは白族の場合(巧女)ももとより同じである。（尙、廣東で採集された繪姿女房譚では山中に棄てられた孔雀の羽根で着物を作つている）勿論、中國における當該說話の示す鳥の羽根の衣というファクターをすべて狩獵生活の產物であると速斷するつもりは毛頭ないが、この型の說話が再三いう通り、日中間に支葉末節まで類同的であるだけに、この口承の傳播を考察する上に、着衣の材料をめぐる小差は無視し難い要素の如く思われるのである。

李氏の表現を借用すれば、一山一水、一草一木に到るまで白族の語り繼ぐ傳說があり、滇西の天地はまさに神話・傳說の海洋・寶庫であるという。從つてこゝに集められた二七篇はその極少にすぎないといえようが、その選擇は比較的多樣性にとみ、その採集地點と口述人とを明示していることと相俟つて、本書の資料性をよりあらしめている。　A5版一六六頁　挿繪十二葉

（伊藤淸司）